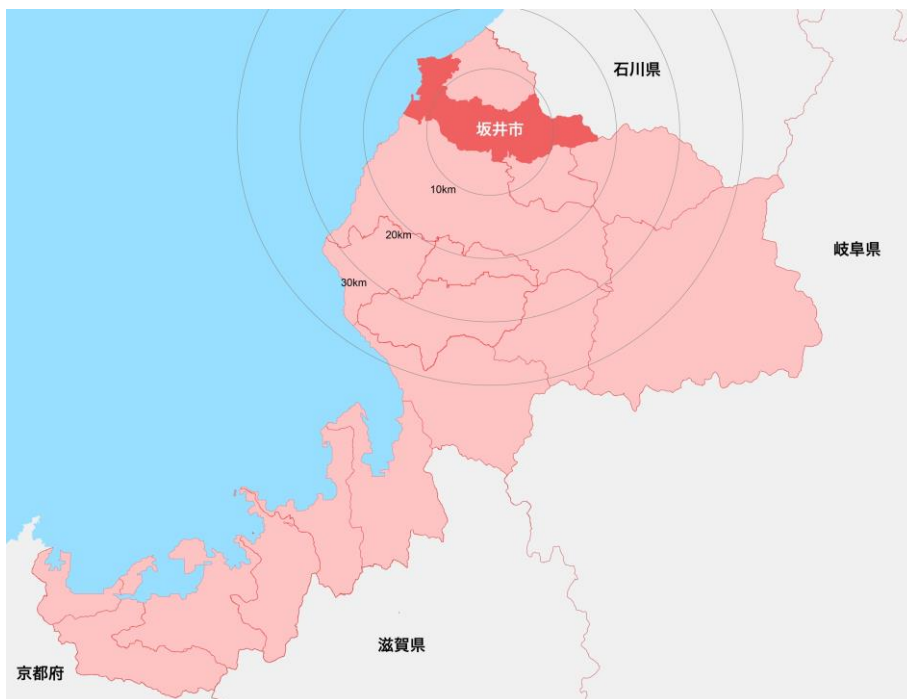


第1章 歴史的風致形成の背景

1. 自然的環境

(1) 位置

坂井市は、福井県の北部に位置し、県庁所在地である福井市から10kmほどの距離にある。西は日本海に面し、北部にあわら市、北東部に石川県加賀市、東部に勝山市、南部に福井市および永平寺町に接する。東西方向には日本海岸から山間部まで約32kmと長く、南北方向は約17kmで、面積は約209.67km²である。



坂井市の位置（国土地理院の基盤地図情報をもとに作成）

(2) 地形・地質・水系

本市の東部には、加越山地の一部を構成する丈競山（標高 1,045m）や浄法寺山（標高 1,052.9m）などの山々が連なっており、山頂からはほぼ市内全域の四季折々の表情ゆたかな姿を望むことができる。また、本市東部の森林地域を源流とする竹田川は、上流部に治水・利水や水力発電を目的とした龍ヶ鼻ダムが整備されており、竹田地区をはじめ坂井市内に豊かな水資源をもたらしている。

南部には、九頭竜川が上流兩岸を山岳地に挟まれるように流れ、河川敷や中洲の緑地と一体となって、潤いのある景観を作り出している。

竹田川・九頭竜川両河川に挟まれた中央部には、福井県随一の穀倉地帯である坂井平野が広がる。この坂井平野は九頭竜川によって運ばれた砂礫や泥が堆積して形成された肥沃な沖積平野であり、平安末期以降には九頭竜川から取水した水を坂井平野に点在する十郷に行き渡らせる十郷用水が整備され、水田地帯の中に集落が点在する農村景観が現在にも残る。

また、坂井平野には河川蛇行による自然堤防や後背湿地が分布しており、平野にはかつて沼地や葦原が多くあったと推定される。

西部には加越台地の西端にあたる丘陵地と砂丘地が広がっている。隆起性の洪積台地である加越台地は水源に乏しい地であったが、昭和 44 年からの国営総合農用地開発事業により約 1,000ha の畑地と九頭竜川からのパイプラインが整備された。九頭竜川河口付近には三国湊の市街地が形成され、北前船の寄港地として栄えた。砂丘地では、水はけの良さを生かしてラッキョウやスイカが特産物となっており、砂丘地特有の農業景観が広がっている。

さらに海岸部沿いには世界有数の巨大な柱状の岩（柱状節理）が続き、国の名勝・天然記念物に指定されている東尋坊をはじめ、雄島と越前松島などを含む海岸区域が越前加賀海岸国定公園の特別保護地区に指定されている。この地域一帯では、巨大な柱状節理の



竹田水車メロディーパークの2連水車



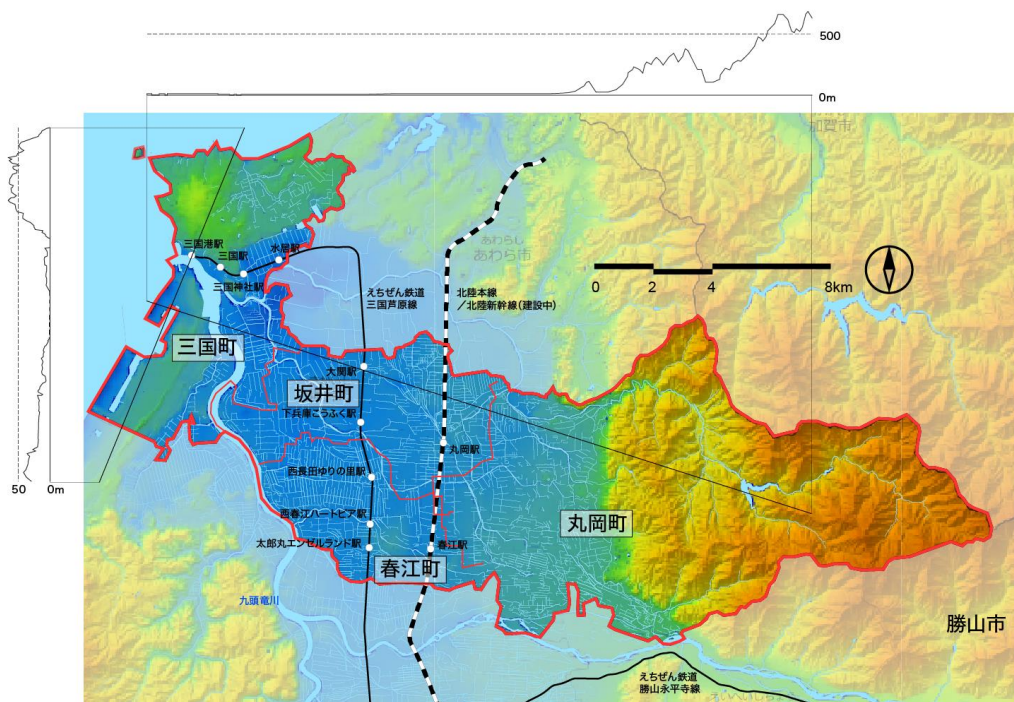
龍ヶ鼻ダム



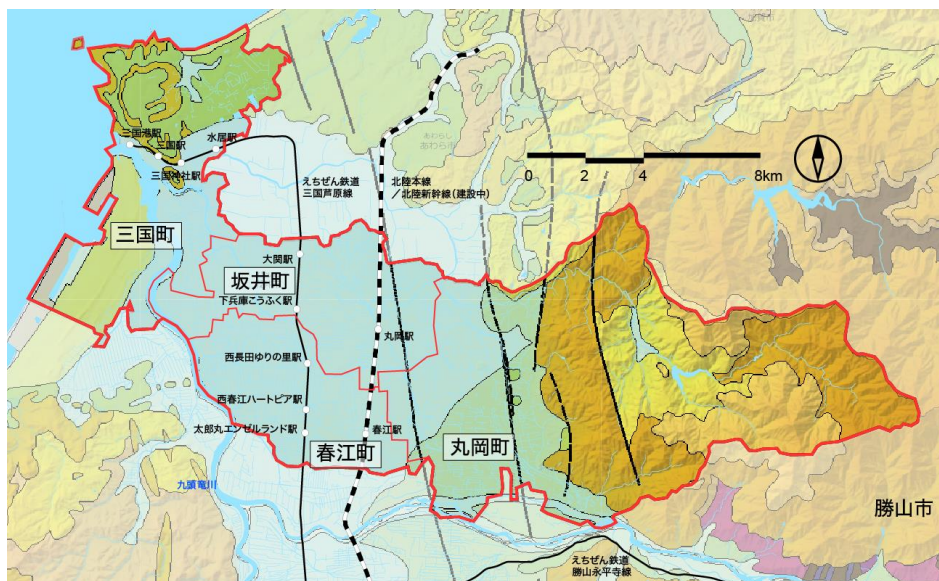
雄島と越前松島

海食崖が見られ、約 1,300 万年前の火山活動と思われる火山岩、火山砕屑岩、火山性堆積岩などが露出する。指定区域では多様な岩質が見られ、東尋坊ではデイサイト、雄島では流紋岩、越前松島では玄武岩質安山岩が見られる。また、火山活動で変動した地層では、断層やしわのように湾曲した褶曲しゅうきよくなどの様子が見られる。そこに長年にわたる風化と浸食が繰り返され、現在の地形が形成されている。風光明媚な観光地としても知られ、多くの文学者や芸術家を魅了してきた。

第1章 歴史的風致形成の背景



標高図（国土地理院地図デジタル標高地形図（令和元年（2019）6月）に加筆）



凡例	岩相	形成時代
	海岸・砂丘堆積物	完新世
	谷底平野・山間盆地・河川・海岸平野堆積物	完新世
	盛り土・埋立地・干拓地	完新世
	扇状地・崖錐堆積物	更新世～完新世
	段丘堆積物	更新世
	安山岩・玄武岩質安山岩 溶岩・火砕岩	中新世
	汽水成層ないし海成・非海成混合層 砂岩, 砂岩泥岩互層ないし砂岩・泥岩	中新世
	デイサイト・流紋岩 溶岩・火砕岩	中新世

地質図（20万分の1日本シームレス地質図V2に加筆）

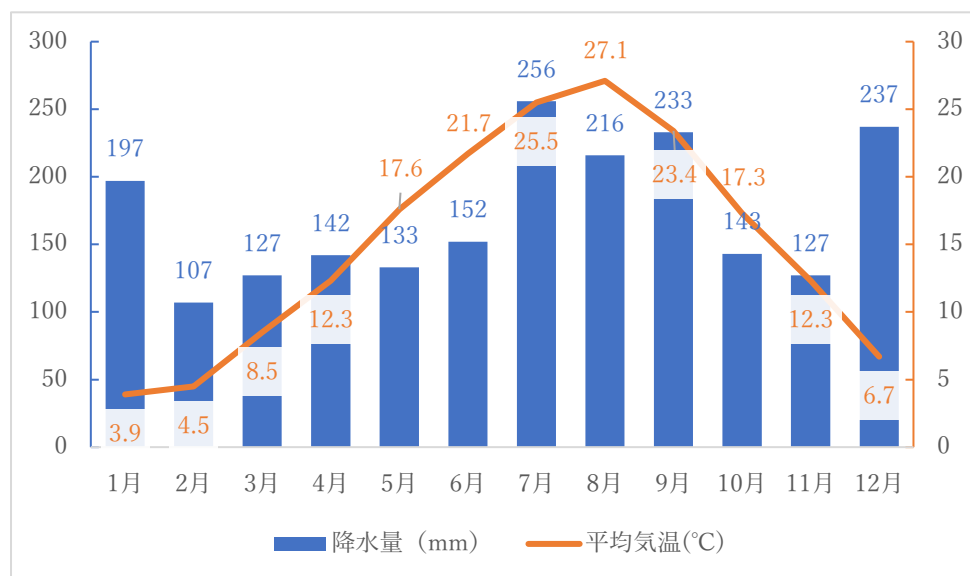
(3) 気象

本市は、冬季に曇りや雪が多い日本海式気候に属す。山間地域においては降雪量が多く、海岸域の積雪量は極めて少ない。三国海岸一帯では、冬になると北西の季節風によって大波が激しく打ち寄せ、東尋坊などの荒々しい海食崖^{かいしょくがい}や海食地形の形成の原因となっている。

平成30年(2018)から令和4年(2022)までの5年間における年間降水量の平均値は2,070mm、平均気温は15.1℃となっている。月別の推移では、降水量は2月が107mmで最も少なく、7月が256mmで最も多い。また、平均気温では、8月が27.1℃で最も高く、1月が3.9℃と最も低くなっている。

	最深積雪量	1日最高降雪量
12月	8.6 cm	11.2 cm
1月	34.4 cm	16.8 cm
2月	16.2 cm	6.4 cm
3月	0 cm	0 cm

積雪量と降雪量の直近5年間の平均値(平成30年(2018)~令和4年(2022))
坂井市統計年鑑(観測地点:坂井町宮領)をもとに作成



月別降水量と月別気温の直近5年間の平均値(平成30年(2018)~令和4年(2022))
気象庁ホームページ(観測地点:三国観測所)をもとに作成

2. 社会的環境

(1) 市町村の合併経緯

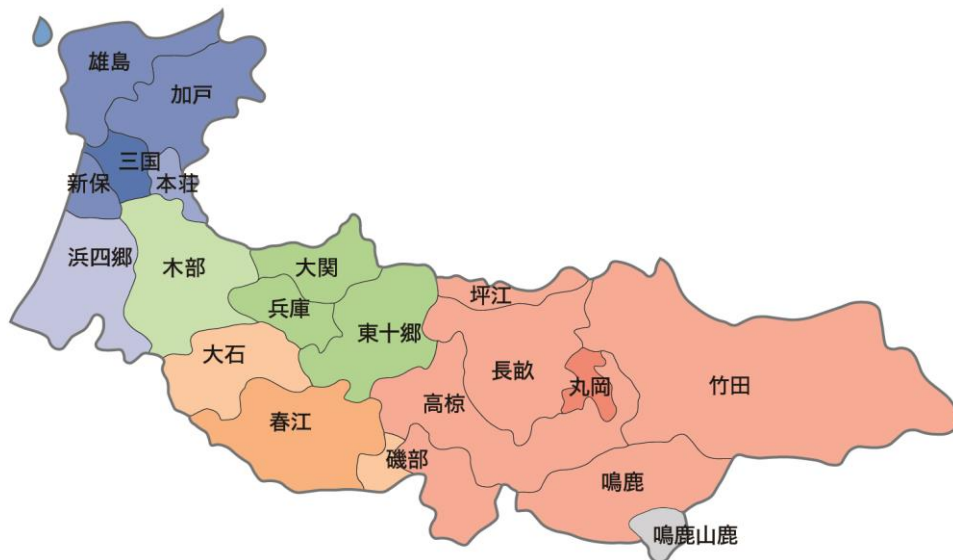
町村合併については、明治21年(1888)の市制・町村制の公布後、旧来の町村を新市町村の大字としたことから、明治22年(1889)4月に下表の町村となった。

昭和17年(1942)に春江村は春江町となった。昭和29年(1954)には、雄島村・加戸村・新保村が三国町と合併した。昭和30年(1955)には、磯部村の一部と大石村が春江町と合併し、鳴鹿村・磯部村の一部・高椋村・長畝村・竹田村が丸岡町と合併した。また、東十郷村・大関村・兵庫村が合併して坂井村が誕生した。

木部村は昭和31年(1956)に坂井村と合併するが、翌年、木部村の北部に位置する7区は三国町に編入し、浜四郷村の一部と共に三国町となった。さらに昭和36年(1961)、坂井村が町制実施となり、坂井町となった。平成18年(2006)に三国町、丸岡町、春江町、坂井町の4町が合併して坂井市が誕生した。なお、合併後この4町名を残し、現在も住所に町名を使用している。

明治 22 (1889)	昭和 17 (1942)	昭和 29 (1954)	昭和 30 (1955)	昭和 31 (1956)	昭和 32 (1957)	昭和 35 (1960)	昭和 36 (1961)	平成 18 (2006)
みくに 三国町								坂井市
おしま 雄島村		三国町	三国町 (境界変更に伴う一部編)			三国町		
かど 加戸村								
しんぼ 新保村								
はましごう 浜四郷村								
ほんじょう 本荘村					あわら市へ			
きべ 木部村								
ひがしじゅうごう 東十郷村					坂井村		坂井町	
おおぜき 大関村			坂井村		坂井村		坂井町	
ひょうご 兵庫村			坂井村		坂井村		坂井町	
まるおか 丸岡町					丸岡町		丸岡町 なるかさんが 鳴鹿山鹿 分割 ↓ 永平寺町へ	
なるか 鳴鹿村			丸岡町		丸岡町			
たかぼこ 高椋村			丸岡町		丸岡町			
のうね 長畝村			丸岡町		丸岡町			
たけだ 竹田村			丸岡町		丸岡町			
つぼえ 坪江村南部集落(他はあわら市へ)								
いそへ 磯部村								
はるえ 春江村	春江町				春江町			
おおいし 大石村			春江町		春江町			

坂井市の合併経緯



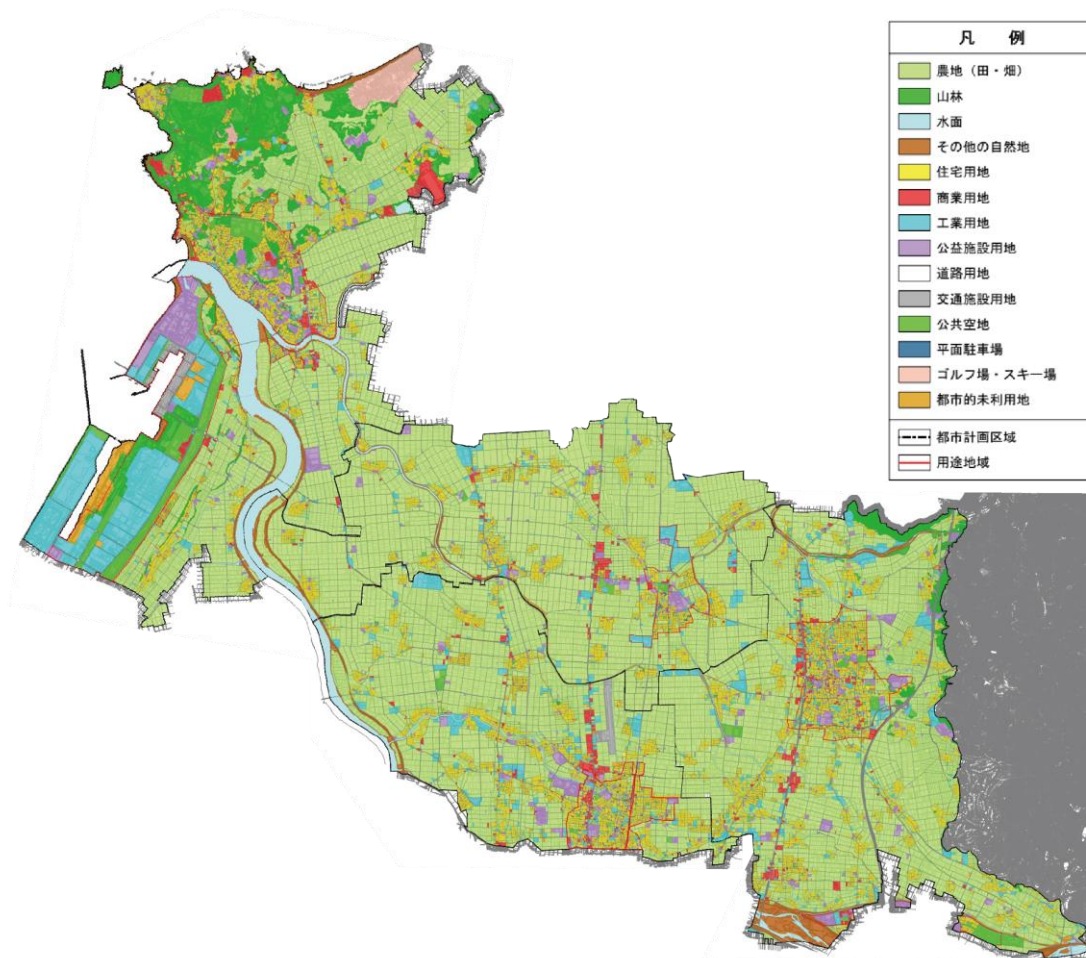
坂井市の旧町村の位置（『福井県史 資料編 17 統計』をもとに作成）

旧4町の人口

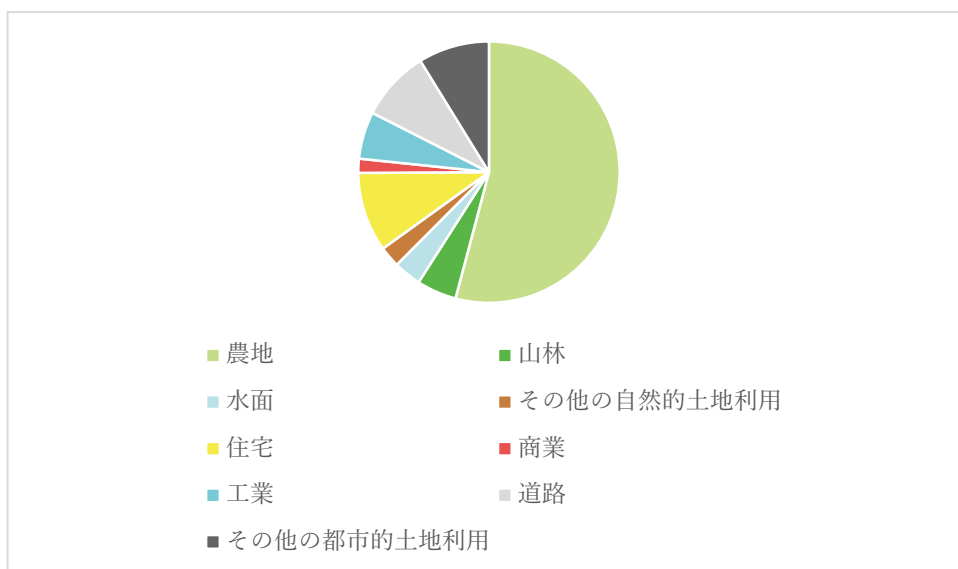
	平成17年（2005）	令和2年（2020）
旧三国町	22,936	20,176
旧丸岡町	32,461	30,728
旧春江町	23,968	25,152
旧坂井町	12,953	12,425

（2）土地利用

嶺北北部都市計画区域の総面積 13,642.8ha のうち、土地利用の割合は、田畑などの農業的土地利用が 54.1%を占めており、豊かな自然環境に包まれている。坂井平野は水田地帯として福井県内で最も土地生産性の高いことに加え、ガン類・カモ類・ハクチョウ類も確認され、鳥類の生息地としても重要な役割を果たしている。冬季には国指定の天然記念物であるヒシクイとマガンが飛来する。都市的な土地利用では、宅地が 9.8%、工業用地が 5.8%を占める。



坂井市の土地利用（平成 28 年度（2016）嶺北北部都市計画基礎調査）



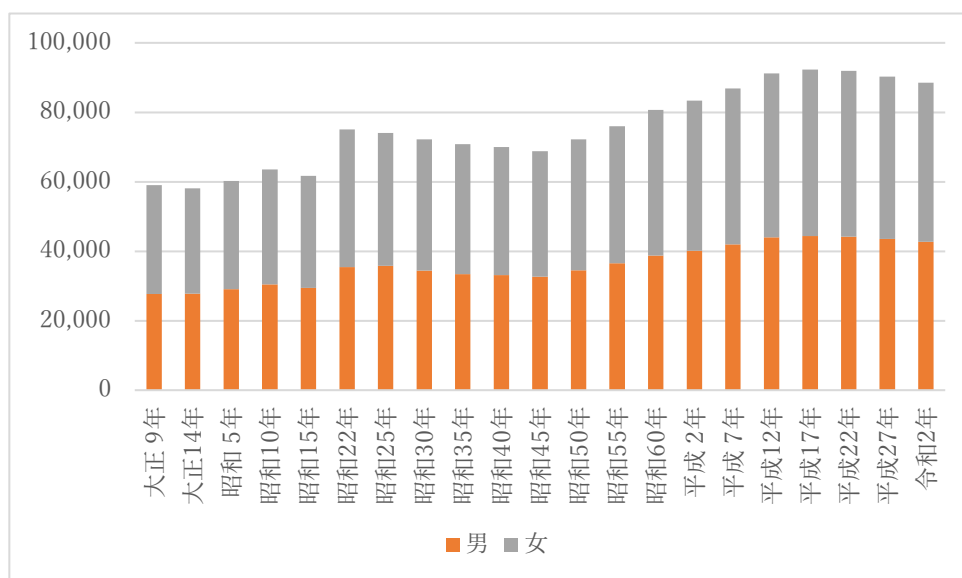
坂井市の用途別土地面積の割合（令和 4 年（2022）坂井市統計年報）

(3) 人口動態

令和2年(2020)10月1日現在の人口は88,481人で、福井県全体766,863人の11.5%を占め、福井市に次ぐ福井県第2位の人口規模となっている。合併直前にあたる平成17年(2005)の人口が最も多く92,318人であり、それ以降は減少傾向にある。

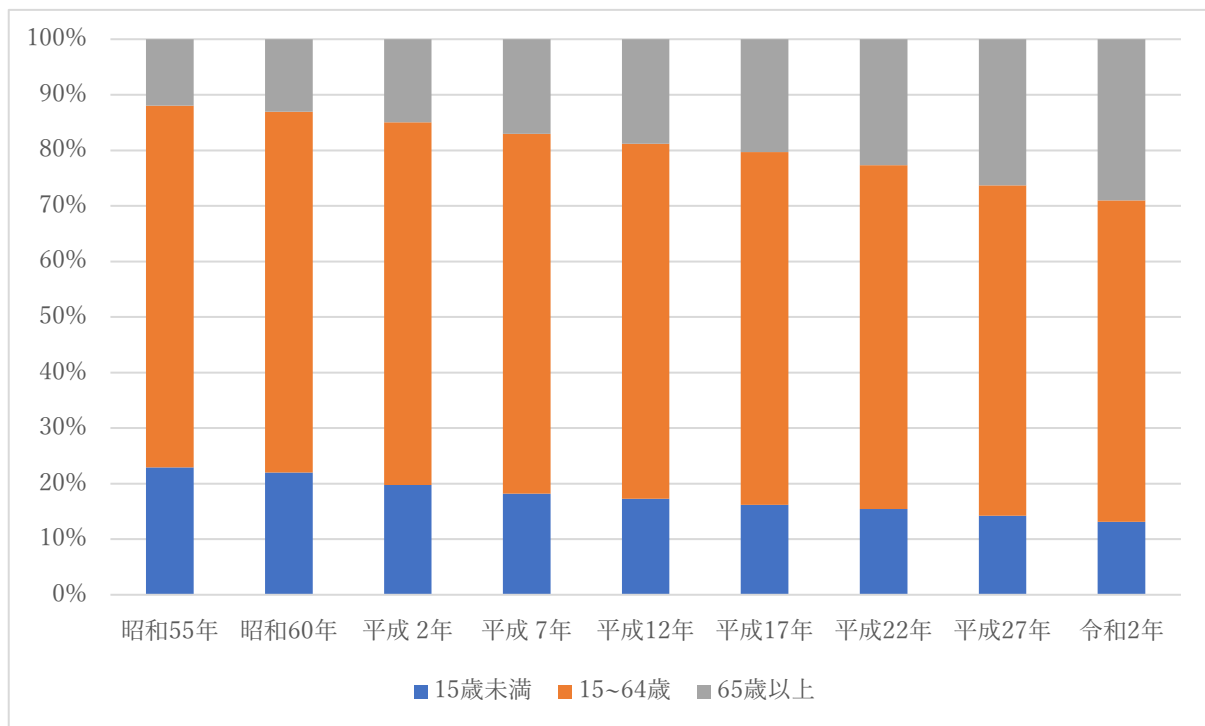
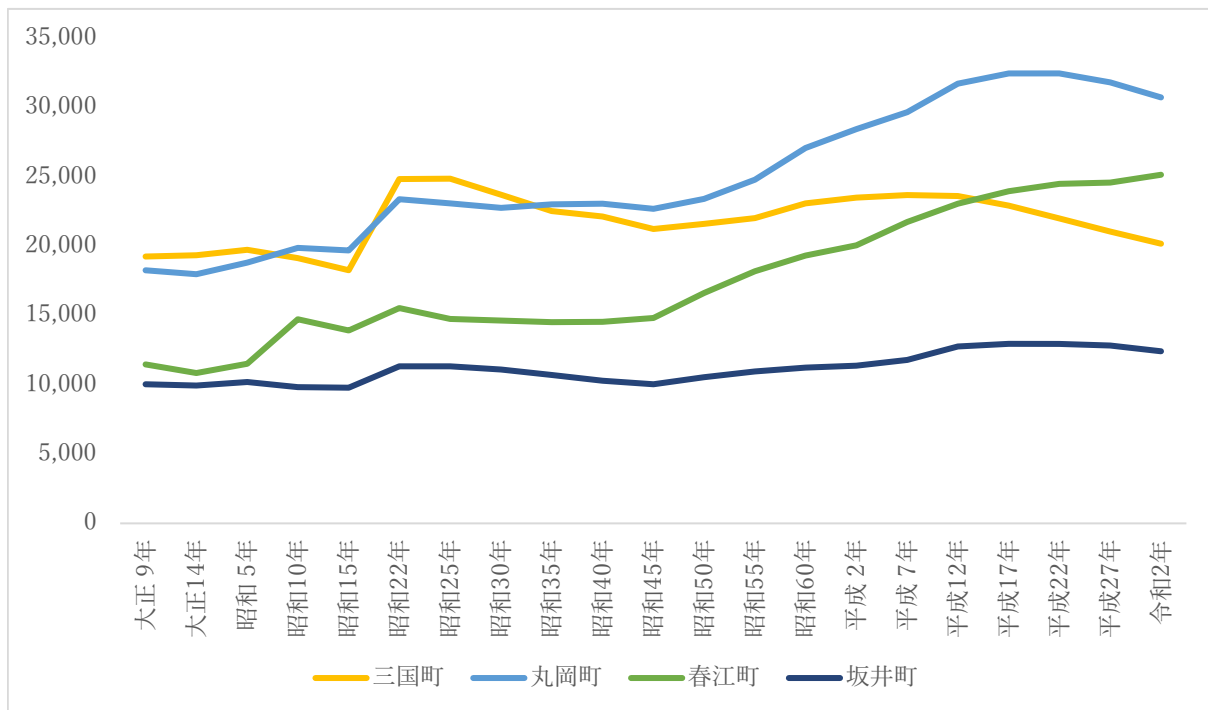
令和2年(2020)における年少人口(15歳未満)は11,535人(13.2%)で、福井県平均の12.6%を上回っているが、減少傾向にある。老年人口(65歳以上)は25,434人(29%)で、福井県平均の30.8%を下回っているが、一貫した増加傾向にあり、平成12年(2000)以降は年少人口が老年人口より少なくなっている。

今後の本市の人口は、国立社会保障・人口問題研究所が平成30年(2018)に公表した将来推計人口によると、令和42年(2060)には59,811人にまで減少することが予測されている。人口減少に伴い、平成18年(2006)では限界集落が1区、準限界集落が37区であったが、令和元年(2019)では限界集落が21区、準限界集落が114区となっている(坂井市人口ビジョン)。準限界集落は市全体に散在しており、全体的に高齢化が進んでいる状況である。

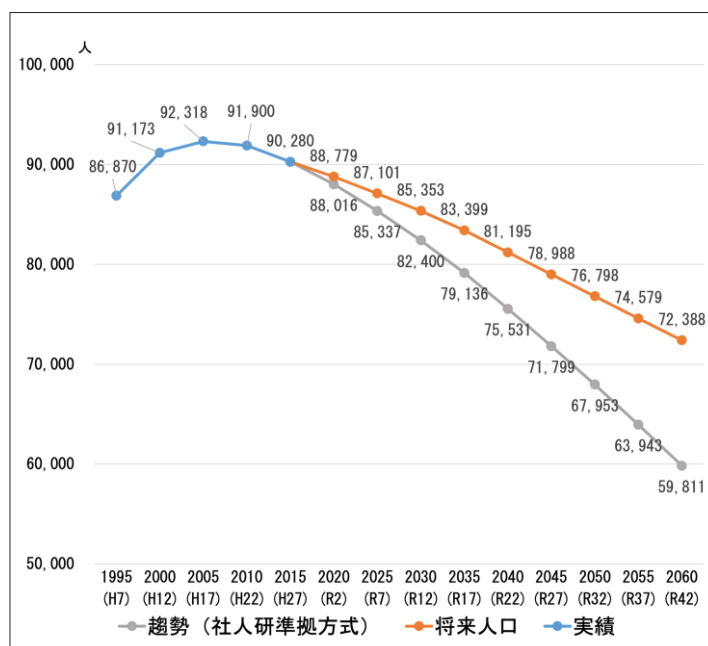


坂井市の男女別人口推移 (総務省統計局「国勢調査」をもとに作成)

第1章 歴史的風致形成の背景



坂井市の地域別/年齢別人口推移（総務省統計局「国勢調査」をもとに作成）



将来の人口や年齢構成の予測値（国立社会保障・人口問題研究所）

（４）交通機関

近世には舟運が輸送の中心であり、福井城下町や嶺北七郡を背に持つ三国の廻船は繁栄を極めたが、明治に入り帆船から汽船へ転換したことや明治30年（1897）に北陸線福井駅－小松駅間が開業したことで交通の中心が海運から陸運へと移った。

明治時代以降、主な移動の交通手段は、鉄道からバスや車に変わった。国道8号、三国・金津・丸岡・鳴鹿なるかの各地域をつなぐ丸岡道や、丸岡町田町から坂井町新庄・大関を通ってあわら市に至る十郷道などが整備された。

戦後、自動車交通の発達により、鉄道利用者が激減し、京福電気鉄道丸岡線と永平寺線が廃線となった。1970年代には国道8号バイパスおよび北陸自動車道が開通した。市内には丸岡インターチェンジが設置されている。

現在、市内の移動手段としては自動車が重要で、東部には北陸自動車道や国道364号、西部には国道305号、中央部に国道8号、嶺北縦貫道、芦原街道が通っている。国道305号は越前海岸一帯と石川県加賀市方面とを結び、山間部を走る国道364号は永平寺町や石川県加賀市山中町方面とを結ぶ重要な幹線道路となっている。

市内の鉄道には、福井市と三国港をつなぐえちぜん鉄道と、JR北陸本線を引き継いで株式会社ハピラインふくいが運営する並行在来線がある。令和5年度（2023）末に北陸新幹線の県内延伸に伴い、隣接市のあわら市に北陸新幹線芦原温泉駅が開

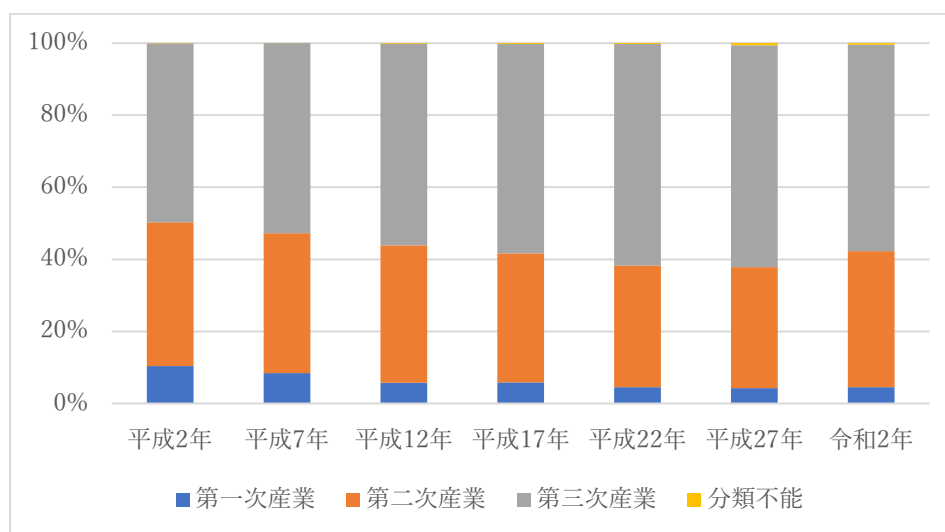
業した。芦原温泉駅から市内各地へは、自動車を利用すれば約 20 分で移動できるため、観光客の来訪が期待されている。また、市内には丸岡駅と春江駅の 2 駅があり、金沢などの北陸方面と米原などの関西方面とつながっている。関西方面への移動では、新幹線開業に伴って金沢・敦賀間の特急列車が廃止されたことにより、敦賀での乗り換えが必要となった。

鉄道以外の公共交通機関としては、京福バスの他、令和 5 年（2023）1 月 13 日からは、近距離移動を支える新たな交通として、坂井市オンデマンド型交通（乗合タクシー）「イータク」が市内全域で運行を開始している。

令和 2 年（2020）には、丸岡町の交通結節点および丸岡城への玄関口として、バスターミナル機能とにぎわい交流機能を併設した施設「丸岡バスターミナル交流センター」を整備した。

（5）産業

令和 2 年度（2020）の国勢調査によれば、本市の就業人口は 46,022 人で、総人口の 52.0%となっている。産業別就業人口は第 1 次産業が 1,739 人（2%）、第 2 次産業が 15,592 人（17.6%）、第 3 次産業が 28,591 人（32.3%）で第 3 次産業の割合が多いことが分かる。第 1 次及び第 2 次産業の就業人口は平成 17 年（2005）から平成 22 年（2010）にかけて減少し、第 3 次産業は微増傾向となっている。令和 2 年（2020）には、第一次産業、第二次産業、第三次産業のいずれも就業人口が減少しており、その減少幅は第三次産業が最も高い。第 1 次産業では、農業、水産漁業、林業と幅広く展開されている。



坂井市の 1 次～3 次産業の産業別就業人口比の推移

①農林水産業

令和2年(2020)の基幹的な農業従事者数は1,227人、農家数が1,316戸(令和2年(2020)農林業センサス)であり、経年的には、農家人口、農家数ともに減少傾向にある。

九頭竜川下流域に広がる坂井平野は福井県屈指の農業地帯となっており、水田地域では稲作を中心として大麦・大豆・蕎麦を組み合わせた農業が盛んである。また、坂井北部丘陵地ではメロン、スイカ、ナシなどの野菜・果物類、三里浜砂丘地ではラッキョウやダイコンなどの野菜を中心とした農業が展開されている。これらの農産物の直売所としては、平成10年(1998)に道の駅みくにの「ふれあいパーク三里浜」や平成12(2000)年に「道の駅さかい坂井地域交流センターいねす」、また平成29年(2017)には、ゆりの里公園内に「ゆりいち」が整備され、地元の季節を感じる新鮮な野菜や果物、特産品が販売されている。



三里浜のらっきょう畑(10月下旬~11月上旬に花が咲く)

漁業は、本市沖の海底の形状が沿岸から沖合にかけて起伏に富み、^{げんたつせ}玄達瀬や松出シ瀬などの大きな天然礁を有していることから好漁場となっている。

しかし近年では、気候変動などによる水揚げの減少から漁業者が減少している。平成20年(2008)と平成30年(2018)に実施された漁業センサスの調査結果を比べると、平成20年(2008)では海面漁業の経営体数が福井県内の市町で最も多い175経営体であったが、この10年で68経営体に減少している。

林業は、市の面積の約3割を山林が占めており、豊富な森林資源を有している。そのうちの約5割が木材生産のために植林された人工林である。林業従事者数は、植林から間伐への作業内容の変化や高齢化により減少傾向にある。

②商業

平成26年(2014)の商業従業者数は5,031人、事業所数は736か所、年間販売額は約1,161億円(平成26年商業統計調査)である。経年的にみると、事業所数は減少し、従業者数は増減を繰り返している。

郊外型の大型店舗やコンビニエンスストアをはじめ、幹線道路沿いへのフランチャイズ系の飲食店や食品、医薬品など取り扱う小売店舗の出店が増加しているとともに、福井市北部地区に本市をマーケットエリアと見込む大規模な商業施設の集積などが進んでいる。地域の商店を取り巻く環境が非常に厳しい中、店舗経営者の高

齢化や後継者不足に伴い、店舗が減少し、空き店舗も増加している。

③工業

令和3（2021）年の事業所数（従業員4人以上の事業所）は318事業所、製造品出荷額は約2,972億円（令和3年工業統計調査）である。近年では、事業所数は減少し、従業者数は増減を繰り返している。また、市内にある最も多い事業所は、繊維産業関係で107事業所ある。丸岡町で生産される細幅織物^{ほそはば}とゆかた帯は日本一の生産量を誇っている。織りの技術を活用し、図柄処理をコンピューターで行い、織物として描画する「越前織」も土産物やカレンダーなどとして生産されている。

（6）観光

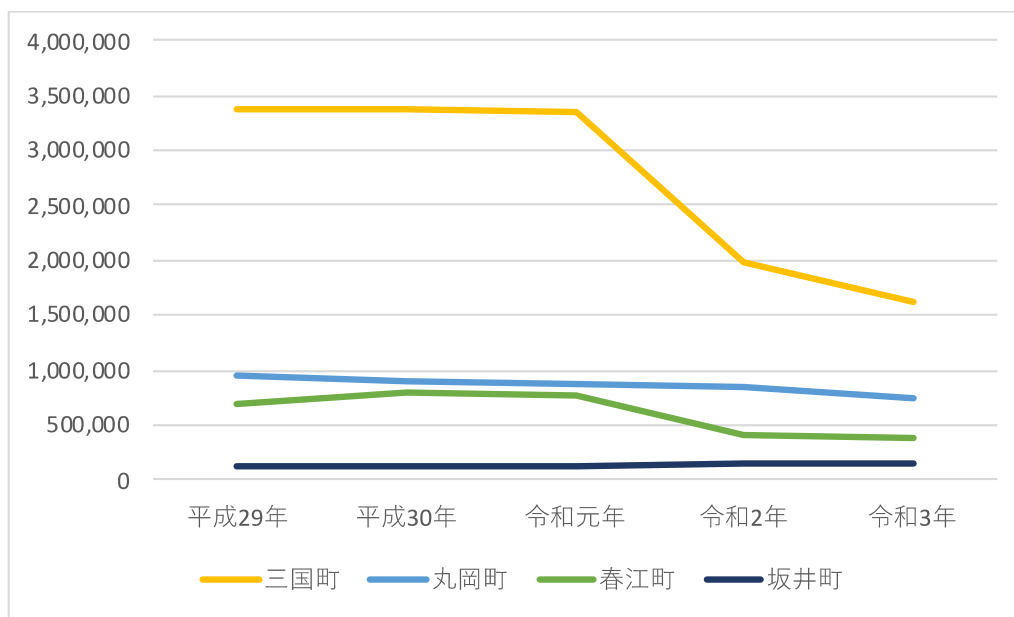
本市は、天然記念物・名勝の「東尋坊」や現存12天守に数えられる「丸岡城」をはじめ、北前船寄港地として日本遺産に認定された「三国湊」など数多くの恵まれた文化財を観光資源とした県内トップの観光客入込数を誇っている。

一方で、より経済波及効果の高い滞在型観光地としての転換は十分とは言い難いため、令和2年（2020）に坂井市観光連盟、坂井市三国観光協会、坂井市丸岡観光協会の業務の一部を統合し、一般社団法人DMOさかい観光局が設立されている。現在、それらを中心に、観光地としての魅力の発信や、自然、歴史、文化財などのゆたかな資源を活かした体験型観光、歴史的な町並み散策、まちなか観光を充実させるなど観光資源の魅力向上に努めている。

東尋坊では、平成23年（2011）に商店街の空き店舗を活用した「東尋坊観光交流センター」の整備をしている。民間の施設としては、昭和34年（1959）に三国町の海岸部に越前松島水族館、令和2年（2020）に空家を活用した全国のお城ファンが集うカフェ「城小屋マルコ」が丸岡城のふもとに整備されている。

また、さらなる誘客のために本市単体だけでなく、隣接市町と連携してテーマやストーリー性を持たせ、それらの魅力を発信する広域観光が推進されている。

令和2年（2020）頃から流行した新型コロナウイルス感染症の観光への影響は大きく、主要な観光地でもある東尋坊や丸岡城の来場者数も流行前の約70%まで落ち込んだ。地域別に比較すると観光客入込数の減少幅が最も大きいのは三国町で、令和元年（2019）以前は3,000,000人以上の入込数があったが、令和3年（2021）には以前の半分程に減少している。北陸新幹線県内延伸により、首都圏からの来訪者の増加が期待される。



坂井市の地域別観光客入込数の推移（令和4年（2022）坂井市統計年報）

3. 歴史的環境

（1）歴史

①中世以前

○旧石器時代

この時代の人々は、土器を使用せず、石を打ち割って作る石器、動物の骨や角を利用した骨角器こっかくきを用いて、氷河期の寒冷な気候の中、動物類を追い求めながら遊動生活を送っていた。福井県内では、三国町内で個人が石器3点を発見し、昭和56（1981）年に後期旧石器時代のものと認定された。これにより、県内でも約4万年前から1万数千年前の後期旧石器時代に人々が生活していたことが確認された。石器が発見された場所は現在、雄島遺跡おしま（三国町安島）・馬コロバシ遺跡（三国町陣ヶ岡）にししもむかい・西下向遺跡（三国町米ヶ脇）と名付けられている。この遺跡のうち、西下向遺跡は昭和57年（1982）・58年（1983）に発掘調査が実施された。出土した石器は瀬戸内・近畿地方を中心に分布する国府型ナイフ形石器に属するものであるが、主流の剥片製作技法である「瀬戸内技法」とは異なり、地方的特色をもつ技法でつくられたものである。この技法は新たに「三国技法」と命名された。この石器が発見された西下向遺跡にししもむかいは、全国でも著名な遺跡として知られている。

○縄文時代

縄よりひもや撚紐を表面に転がしたり、粘土を華麗に貼り付けた土器を「縄文土器」と呼び、それらの土器の製作・使用した時代は「縄文時代」と呼ばれている。縄文時代は、1万数千年もの長期間にわたり、土器によって草創期・早期・前期・中期・後期・晩期の6期に区分される。この時代は、大きな気温変動で、「縄文海進」・「縄文海退」と言われる海水面の移動があった結果、居住できる場所が時期により変動したりしていたのではないかと推測されている。本市のあたりは、平野部のほとんどが海で、湾のようになっていたとされる。

本市では草創期から前期の遺跡が少ないが、北陸自動車道や北陸新幹線県内延伸、圃場整備といった開発に伴う発掘調査により、東ひがしむかいの向野遺跡（丸岡町おぐろ小黒）などでは中期から晩期の多くの遺構や遺物が確認されている。これまでは、縄文時代の集落は、山地に近い台地上や河岸段丘上に形成されたと考えられていたが、沖布目北遺跡（春江町沖布目）では平野部に集落跡が確認された。他にも沖積地の坂井平野内に位置する舟寄遺跡（丸岡町舟寄）では、縄文時代中期の土器や石器が出土したほか、10基以上の建物跡が発見された。縄文時代中期以降、人々の生活の場は坂井平野の微高地などに移っていったとみられる。

○弥生時代

日本列島で本格的に水稻耕作が始まった時代が「弥生時代」と言われる。弥生時代は稲作と共に、各種の技術なども各地域の交流に伴って伝播した。近畿地方を中心に確認されている農耕祭祀に使用された銅鐸が、春江町井向いのむかいや三国町米ヶ脇など、市内でも複数の場所で発見されている。日本全体で見ると、本市は銅鐸の発見場所としては日本海側で北限にあたる。また、加戸下屋敷遺跡（三国町加戸）、河和田遺跡（坂井町河和田）では玉作にともなう遺物が出土しており、北陸地方各地に共通するように、管玉くだたまや勾玉まがたまなどの玉類の生産が本市においても盛んであったことがわかる。



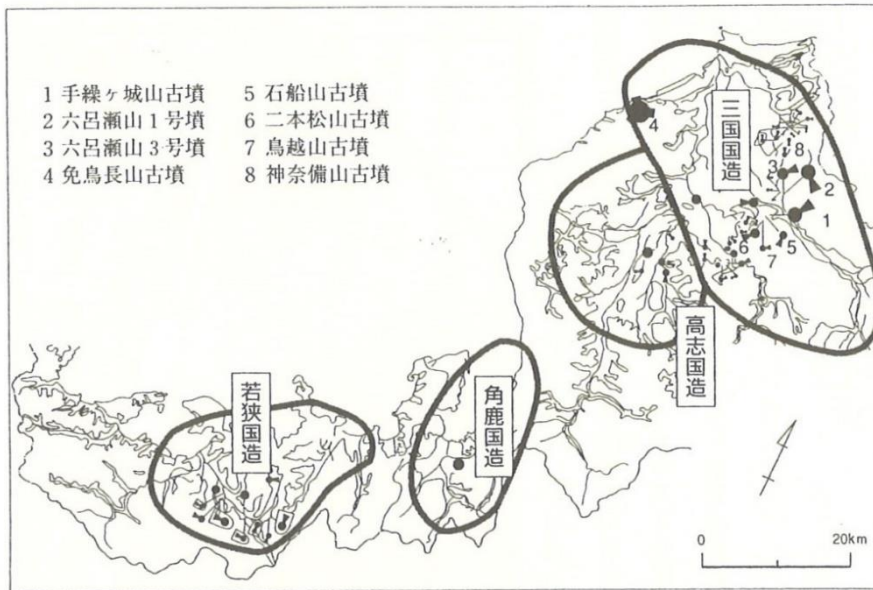
緑色凝灰岩原石
玉造関連遺物（河和田遺跡）
（福井県埋蔵文化財調査センター）



袈裟襷紋銅鐸（三国町米ヶ脇）
（坂井市龍翔博物館蔵）

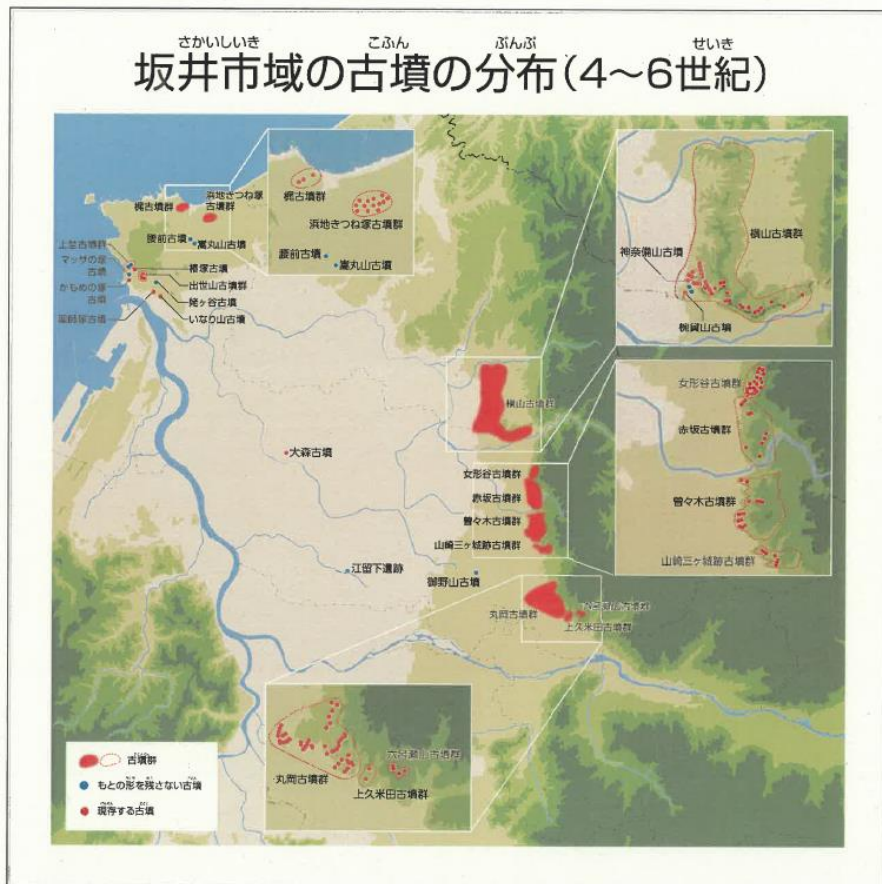
○古墳時代

古墳時代は、前方後円墳などの古墳が造営され、中央（大和政権）と各地の政治勢力のつながりが形成されていく時代である。本市は、継体天皇の母・振媛ゆかりの地で天皇が育った「坂中井の高向」があったと推定されている。それを裏付けるかのように、市内には継体天皇の伝承が多く残り、中央とのつながりが特別強い地域であったと言える。市内には、葺石・埴輪を有し、笏谷石製の石棺を納めたと推定される前方後円墳（1号墳・3号墳）を核とする六呂瀬山古墳群（丸岡町上久米田・下久米田）があり、1号墳は北陸最大の全長143mを誇る。山の尾根を利用して作られており、前方後円墳でありながら整った形はしていない。また、本市北東部からあわら市にまたがる山地には、総数約310基からなる横山古墳群がある。この古墳群の南端に位置する前方後円墳の椀貸山古墳（丸岡町坪江）は、継体天皇ゆかりの椀子王子の墓とも伝えられる。この椀貸山古墳とその間近の神奈備山古墳は、横穴式石室の特徴から九州地方との交流があったことを示している。これらの古墳群のほか、永平寺町の松岡古墳群なども合わせると、本市や本市周辺の山地には現在の福井県嶺北地方にある前方後円墳の約4分の1が集中している。平野部を見下ろせる位置にあり、麓に住む人々に大きな力を誇示する大豪族がいたことがわかる。一方、西部丘陵には三国町にも出世山古墳群（三国町宿）をはじめ、水運を意識した5～6世紀の古墳が丘陵上に展開している。



越前若狭の国造と前方後円墳の分布（『新修 坂井町誌』）

三国国造の統治範囲は越前国の約半分であったと推測されている。坂井郡にある古墳群は、三国国造と関係が深いことが推測される



坂井市龍翔博物館作成

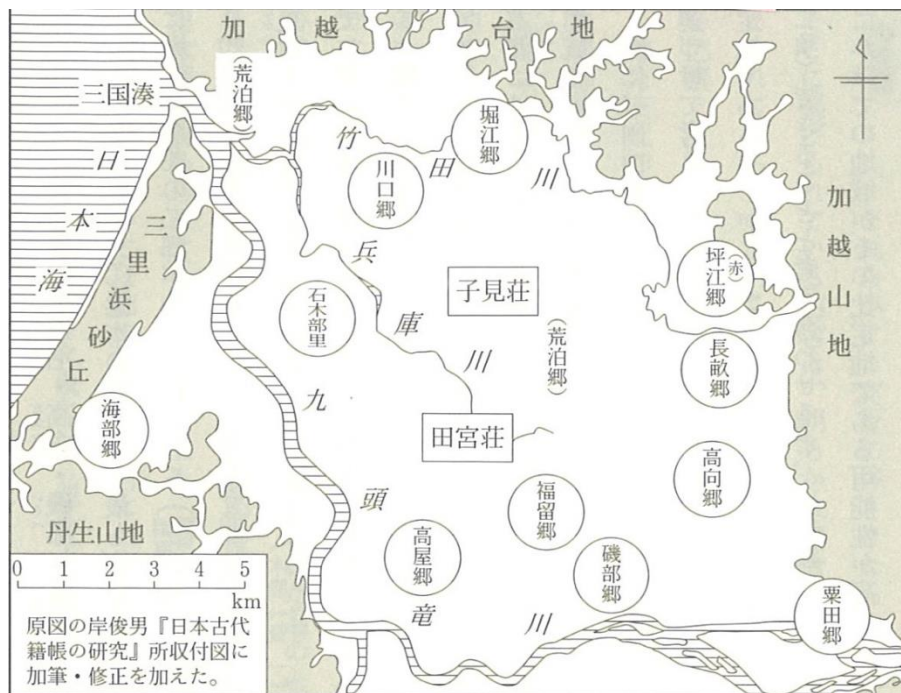
三国の名が史上に初めてみえるのは、『日本書紀』の継体天皇即位前紀で、天皇の父、彦主人王ひこうしのおはさみが近江国高嶋郡の三尾（滋賀県高島市安曇川町付近）の別行なり（別邸）より使を遣して、天皇の母、振媛を三国の坂中井からむかえて妃としたという記事である。天皇が幼年のとき、父王が亡くなったので、母の振媛は父母の安否を問うついでに郷里の高向に帰ったという。『日本書紀』は高向を越前の邑さとであると注記している。さらに武烈天皇亡き後、継嗣が絶えようとしていたので、大伴金村等は男迹大王（後に即位して継体天皇。本計画書では「継体天皇」に統一して記述）を三国より迎えたみ おのきみと伝えられている。なお天皇と三尾君かた い やまとひめ堅槓の女・倭媛との間に生まれた椀子王子を三国公の祖としている。ちなみに三国は坂中井（のちの坂井郡）を中心とした広い地域の名称である。



『越の振媛と継体天皇』
（丸岡町教育委員会）

○奈良・平安時代

奈良時代には、天皇中心の律令制度に基づく中央集権の国家体制が整備されていき、地方は国・郡・里（のちに郷）を単位として区分された。もともと北陸地方は、越と呼ばれていたが、持統天皇の時代までには、越は越前・越中・越後に分国して越前国が誕生したと考えられている。その中であって、市域は坂井郡に属し、『和名類聚抄』高山寺本（平安時代末期）では、坂井郡は粟田・荒泊・高向・磯部・長畝・高屋・坪江・福留・海部・川口の10郷あらかがあったと書かれている。これらの郷の推定地は、木簡や文書によってほぼ特定されている。律令制が整備されたことにより、交通路も整えられ、市域のほぼ中央に官道の北陸道が通り、各所に駅も設置されていったとみられる。



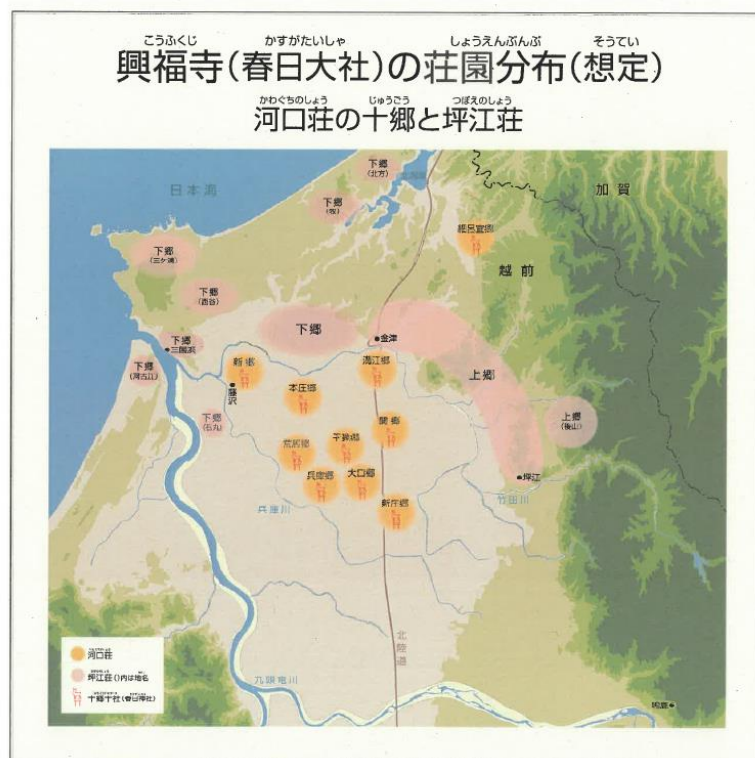
坂井郡郷（里）の分布（『新修 坂井町誌』）

荘園の形成

天平 15 年（743）に墾田永年私財法が發布されて以降、市域には寺社が所有する荘園が形成された。この荘園での収穫は九頭竜川の水運を利用して三国湊へ運ばれ、琵琶湖・宇治川・木津川を經由して奈良の都へと運送された。しかし、荘園専属の田地耕作者となる農民がおらず、安定した労働力の確保が難しく、荘園経営は大きく崩れ、10 世紀頃までには一時衰退していったとされる。

市域において本格的に荘園が成立・確立するのは、平安末期に、現在の坂井市からあわら市にかけて成立した越前国河口荘が、白河法皇により奈良の興福寺に寄進されてからである。興福寺領の荘園が市域に進出し始めると、いずれも藤原氏の氏寺・氏神である興福寺と春日大社との関係が強まり、神仏習合思想とした本地垂迹説も流行していたことから、春日信仰も市域に広がっていった。このほか、市域には、岐阜県・石川県・福井県の 3 県にまたがる霊峰白山を神の山とする白山信仰も既にあった。

この頃には、坂井郡は九頭竜川を挟んで、坂北郡、坂南郡の二郡に分かれていった。



坂井市龍翔博物館作成

兵庫地区では、平安時代に春日大社と一体となった、奈良興福寺の荘園であったという史実が縁となり、小学校学校田「育つん田」で収穫されたお米を、毎年、奈良興福寺に献上している。また、平成 29 年（2017）えちぜん鉄道の駅名変更では、地区の興福寺とのゆかりと幸福度 1 位の福井県をかけあわせて、駅名を下兵庫こうふく駅とした。

東大寺による大規模荘園開発

東大寺は越前をはじめ北陸地方で大規模な荘園開発を行った。当時の越前は有望な未開発の原野に恵まれており、九頭竜川系諸河川および日本海の水運などを利用すれば、荘園の産物を奈良の都に運送できるという利点を持っていた。東大寺は越前荘園の経営にあたって足羽郡や坂井郡で水運を利用し得る地点に荘園を設け、三国湊を利用し、^{しょうまい}春米（京都に納めた米）等を積出した。

斎藤氏と春日大社

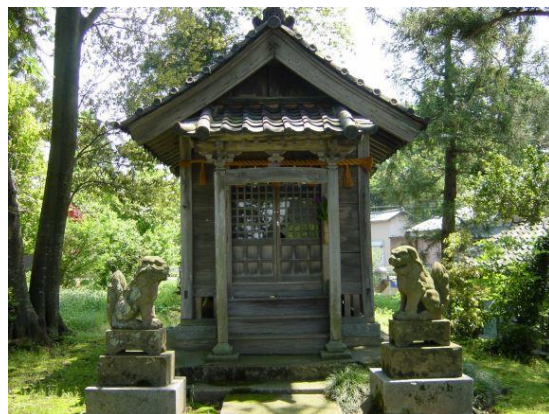
坂井市には、斎藤実盛に関連する市指定文化財（遺跡）が2か所所在している。

斎藤実盛は、天永2年（1111）、越前国丹生郡南井で河合斎藤氏の河合則盛の子として生まれた。後に実盛は、武蔵国の長井に在住していた斎藤氏の一族に養子となった。斎藤氏は、越前に勢力を持った平泉寺（勝山市）とも結びついていて、長史（指導者）を出している。平氏が今庄の源義仲方の燧ヶ城を囲んだとき、城内にいて平氏に寝返り、落城させた平泉寺の長史斉明は斎藤氏の長史だったといわれている。

実盛池は、丸岡城の北東にあり。源平合戦に名高い斎藤実盛にゆかりの池である。伝説によれば、実盛誕生の際にこの池の水を産湯に使ったという。上長畝には実盛の館といわれる長畝館跡と実盛堂がある。実盛堂は斎藤実盛を祀った堂で、仏師・新井九兵衛作の実盛の武人像（江戸時代末期）、僧衣の実盛像、十一面観音が安置されている。



実盛池



実盛堂

十郷用水は、寛弘8年（1011）、越前国の押領使おうりょうしの斎藤民部少輔伊傳が開発したという伝承があり、斎藤氏の祖先である藤原氏の神社である春日神社を十郷に創建した。その惣社はあわら市本荘の春日神社であり、もともとは継体天皇に由来する井口神社であったとされている。本庄の春日神社の神官と井守（用水の管理責任者）を大連家が担当して江戸時代には用水管理の任にあたった。

藤原北家利仁流斎藤氏の一族は越前、加賀で勢力を伸ばし、平安時代後期から鎌倉時代にかけて越前押領使、加賀介などの要職を歴任し、全国各地の地頭となった。戦国時代の加賀守護の富樫氏、美濃の守護代・守護の斎藤氏も一族である。江戸時代の大洲藩主、水口藩主の加藤氏（加賀斎藤から加藤氏となる）も一族である。

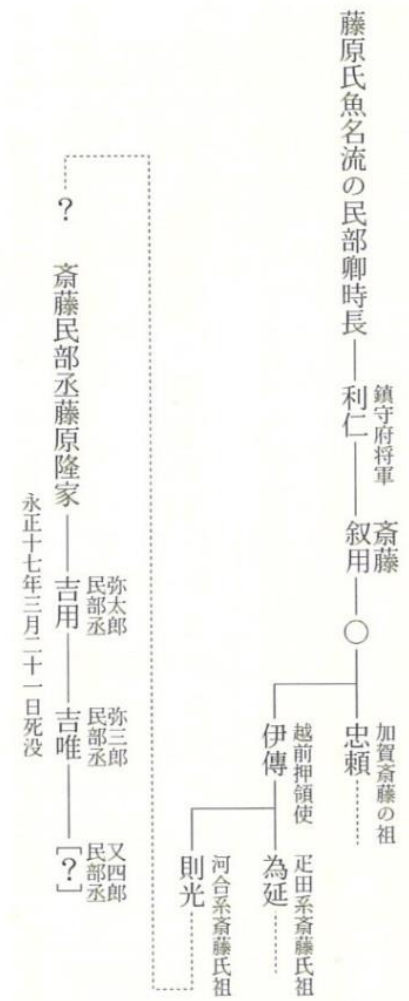
歌舞伎十八番の『勸進帳』で知られる富樫氏の分家が坂井市丸岡町坪ノ内に本拠があった坪内氏である。坪内氏は越前守護斯波氏の家臣として尾張に赴き、木曾川流域の国人領主となった（尾張国松倉城主、現在は岐阜県各務原市に属する）。坪内氏は木曾川流域の国人・土豪（蜂須賀、生駒、土田、前野、大沢氏など）を坪内党として束ねていた。

徳川家康に仕えた坪内氏は江戸初期から幕末まで 6,500 石の大身旗本（寄合）として続いた。近年、坪内氏陣屋跡地は新加納陣屋公園として整備された（岐阜県各務原市）。坂井市の現在の行政区域内の地名に由来する江戸時代の大名、大身旗本（寄合という地位、3千石以上の旗本、領地に陣屋を置く）クラスの有力武士は坪内氏のみである。



十郷用水絵図 あわら市 大連勝美氏蔵（『図説福井県史』より）：十郷用水のうち横落堤以北を描いており、主要な5本の江筋がみえる。丸岡城東方の水路は新江用水である。

齋藤氏系図（『新修 坂井町誌』）：藤原利仁は鎮守府將軍。その子孫が齋藤氏となり、有力な武士団として繁栄した。藤原利仁は、『今昔物語集』の中にある、五位の者に芋粥を食べさせようと京都から敦賀の館へ連れ帰った話が有名である。



② 中世

○鎌倉時代

源頼朝によって幕府が開かれた鎌倉時代には、地方支配のために守護・地頭が任命され、地方に置かれた。坂北郡内の河口荘の地頭には、竹田川中流域を主に本拠としていた^{ひきた}足田系齋藤氏の武士が命じられたとされる。河口荘は、^{しんじょう}新庄郷・^{せき}関郷・^{おおくち}大口郷・^{おうみ}王見郷・^{ひょうご}兵庫郷・^{あらい}荒居郷・^{しん}新郷・^{ほんじょう}本庄郷・^{みぞえ}溝江郷・^{ほそろぎ}細呂宜郷の10郷に分かれ、隣接の坪江荘とともに、領主の興福寺にとって重要な経済基盤であった。

広大な荘園を維持するには、水の供給が必要である。奈良時代以降に開削された用水を整備・統合し、大規模な農業用水が形成された。なかでも、九頭竜川を水源に^{なるか}鳴鹿地域で取水し、坂井平野一帯を灌漑する用水は、河口荘十郷にちなみ、^{じゅうごう}十郷用水と呼ばれた。一方、坂井平野に広がる荘園の年貢物の積出港の三国湊は川の舟運を利用して発展した。鎌倉時代後期には、時宗の開祖・^{いっぺん}一遍の弟子である^{しんきょう}真教が越前を訪れ、現在の丸岡町長崎に称念寺を創建した。

また、関東地方にルーツをもつ真宗高田門流の集団が越前に最初に入り、続いて浄土真宗本願寺門流の集団も越前に進出した。

^{えとみ}榎富荘（^{えどめ}春江町江留上・江留中・江留下）は女院領となった。女院領は課税が免除されていたことで、管理を任されていた^{げにん}下人がのちに裕福になり、都で金融業の^{かしあげ}借上を行うなど、下人らも次第に力を持つようになっていった。

○南北朝・室町時代

元弘3年（1333）に鎌倉幕府を倒した^{ごだいご}後醍醐天皇を中心に行われた政治が短期間で崩壊した。その結果政権が不安定になり、次の政権争いのために朝廷が北朝方と南朝方に分かれて抗争したのが、南北朝時代である。南朝方の拠点を作ろうと、後醍醐天皇は、^{にった よしさだ}新田義貞を皇子とともに越前に入国させた。以降、越前国内で合戦が繰り返され、最後には北朝方が勝利した。

越前の各地で戦った義貞は、^{とうみょう じなわて}藤島の灯明寺^{なきから}（現在の福井市新田塚町あたり）で越前守護の^{しほ}斯波氏の軍に敗れ、命を落としている。義貞の亡骸は時宗の僧によって^{ほうむ}葬られ、称念寺（丸岡町長崎）の境内には新田義貞の墓所がある。

^{たかうじ}足利尊氏により、室町幕府が開かれ、室町時代が始まる。南北朝時代から室町時代を通して、越前は守護となった斯波氏が支配した。

文明3年（1471）には、浄土真宗本願寺の八世・^{れんによ}蓮如が吉崎（あわら市）に滞在し、^{おふみ}御文（^{ごぶんしょう}御文章）を用いた積極的な教化を行ったことで、本願寺門流は北陸地域

で飛躍的に勢力を拡大させていった。また、三国湊は、当時の海商法規『廻船式目』^{かいせんしきもく}の中で、主要な湊町^{さんしんしちそう}三津七湊のひとつとして記載される、全国的な物資の輸送交易港として繁栄した。

三国湊と三津七湊

中世の三国湊は日本海沿岸有数の要港として、また河口、坪江両荘の年貢・産物の積出港として重要な地位にあった。

三国湊では、千手寺、性海寺に大密教寺院付近の諸町が港町形成の最も古い歴史を持っている。とりわけ千手寺の門前町が中世に起源をもつ町と推定される。

戦国時代には成立していたとされる海商法規『廻船式目』の中には、日本の室町時代における重要な湊が10箇所あり、それが三津七湊である。三津とは、伊勢の津、筑前の博多、泉の堺である。七湊とは、越前の三国、加賀の本吉、能登の輪島、越中の岩瀬、越後の直江津、出羽の秋田、奥州の十三湊である。三国湊は全国で4番目に記載されている。

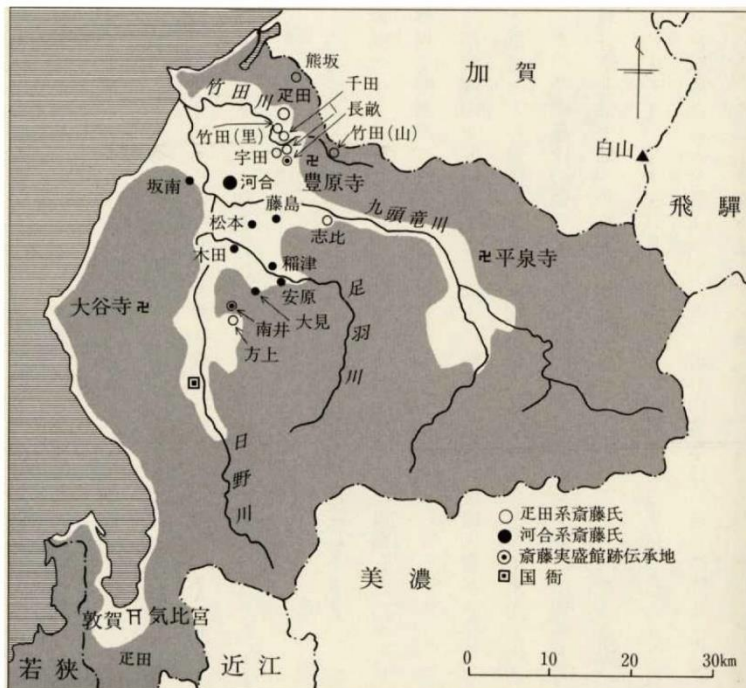


河口・坪江庄要図（『芦原町史』より）

越前における武士団の形成、国人領主として三国湊を統治した堀江氏

堀江氏は藤原利仁の子孫と伝わり、鎌倉時代以来、坂井郡一帯を支配し、文明(1470年頃)以来朝倉氏に臣従した。堀江景経は、長祿年中(1460年頃)、番田に館を造ったといわれている。朝倉敏景に従い2,500貫の領地を有し、その勢力を誇った。一時、兵庫郷井向村(坂井市春江町)にも居を移している。

守護朝倉氏の下で最有力の外様であり、一乗谷に退いた。朝倉氏と対立し能登に隠居した。信長に協力したが、後に瀧谷寺で謀殺されたという。



越前斎藤氏の勢力図(『福井県史』より)

瀧谷寺石龕開山堂

室町石仏または朝倉石仏(笏谷石)といわれる。内側石廟に十三仏が浮き彫りにされている。堀江氏(元奈良大乘院荘園預かり本荘庄の地主)が築造したもので、堀江氏は後に織田信長と相通じた。

中世以降、当地方を支配した豪族堀江氏をはじめ、朝倉氏、柴田氏、さらに福井藩主松平氏、丸岡藩主本多・有馬両氏ら領主の祈願所であり、その保護を受けた。

朝倉氏一族の向氏

『一乗録』(江戸時代中期に成立とされている)によれば越前向氏は朝倉氏庶流の一門で、南北朝時代に朝倉氏二代目朝倉高景の三男である久景が向姓を名乗ったことが始まりであるとされる。越前国の坂井郡に拠点を置いていた一族で、紀倍神社の社記曰く1万石を領する大身であったという。

天正3年(1575年)に信長が越前一向一揆の鎮圧に本腰を入れて乗り出し、越前に進軍したときには、8月12日に敦賀に滞陣していた信長の前に現れ、再び降伏を

願い出た。信長は久家を助命し、同年8月16日には信長の命で朝倉景健自害の検死役を務めた。その後の動向は不明である。

紀倍神社は、越前朝倉氏の一族である向氏の屋敷「木部新保館」があったとされる。高景の5男、向駿河守久景の子、光繁が永正元年（1504）鬼辺郷を領してその子久家と共に当地に居館したという。向氏館跡と思われる地は明治初年の地籍図で72字「館屋敷」73字「岡田屋敷」が館跡で環濠と土居が描かれている。

『明智軍記』（山城屋佐兵衛版、元禄15年）と三国湊

『明智軍記』には、朝倉家家臣時代の明智光秀が三国湊を訪問したときの様子が詳しく書かれている。同書からは光秀と称念寺の関係が深いことがわかる。

興廢非無期、今既為荒廢之地、無日修營之由、再
 三盡言談、於是成委、問靈寺之根源、信、心、面、
 見佛法之陵夷、不耐悲歎、即對伽藍、願、云、昔淡海
 公七代後胤、民部卿藤原時長為越前刺史、赴任之時、
 當國押領使長、大、夫、豐國之娘、利、仁、繼、外、戚、之、
 是也。坂南北是則豐國之家領也。利、仁、繼、外、戚、之、
 領、於、彼、地、以、成、又、伊、勢、守、大、江、浦、景、世、江、相、孫、七、
 七代孫掃部大夫藤原為長、為、妻、生、以、成、。我、願、任、
 利、仁、之、先、蹤、得、繼、。外、家、之、跡、。若、依、本、尊、之、冥、助、遂、
 懷、之、素、願、者、以、成、在、生、之、時、必、興、隆、當、伽、藍、。此、地、建、
 五、百、余、宇、之、禪、房、。挑、顯、密、二、宗、之、法、燈、云、々、其、後、精、
 不、虛、心、願、遂、成、。外、舅、監、物、大、夫、藤、原、為、盛、俄、死、亡、之、刻、
 、其、男、利、延、在、襁、褓、之、間、。以、成、依、為、成、長、之、仁、不、慮、繼、
 彼、家、業、一、偏、依、當、寺、之、靈、應、傳、豐、國、之、遺、跡、。豈、非、不、可、

右當寺草創者、文武天皇御宇、大寶貳年仁泰澄和
 尚開闢之地也。初於越知峯、久修練行及多年、或時
 瑞雲屢不現香爐。火消道場風冷、和尚驚怪、瞻
 望四方、當東北角、豐原山上空中見一聚紫雲、雲中
 有、天、女、。其、雲、東、方、至、二、神、峯、而、即、消、連、日、如、此、。於、是、
 和、尚、遙、尋、紫、氣、。自、越、知、峯、移、當、山、洞、。即、眺、望、之、處、求、得、
 清、水、涼、之、巖、泉、。宛、如、功、德、池、之、甘、味、。泉、流、顯、鑲、字、形、
 奇、巖、似、古、佛、之、像、。和、尚、靈、瑞、之、新、為、奇、異、想、。結、草、
 庵、於、此、地、契、佛、法、出、來、際、。即、用、彼、巖、泉、號、關、伽、井、水、
 自、巖、泉、之、底、二、聚、之、紫、雲、涌、出、。中、有、天、女、。其、後、祥、雲、
 漸、引、亦、至、二、神、峯、。和、尚、從、雲、復、登、彼、峯、。雲、氣、不、留、至、
 大、日、數、如、此、漸、引、至、雪、嶺、之、巔、。于、時、和、尚、深、慕、靈、城、。不、
 憚、嶮、路、。攀、碧、巖、之、幽、崖、。陟、白、山、之、絕、峯、其、山、奇、秀、

任夷大將軍從一位行內大臣源朝臣以當寺、可、以、為、御、祈、
 願、寺、之、旨、。應、永、廿、三、年、十、一、月、廿、七、日、仁、御、判、被、成、下、
 畢、。依、之、每、月、御、祈、禱、護、摩、三、壇、勤、住、之、。此、內、十、一、
 面、護、摩、七、日、三、時、也、。藥、師、如、來、護、摩、三、時、深、沙、王、護、摩、七、
 時、嚴、重、御、祈、禱、卷、數、等、各、進、上、之、。御、所、願、成、就、更、以、無、
 疑、所、也、。
 (別筆)
 元祿拾六年十二月
 範 純 (花押)

思議之神思、我、依、之、數、箇、所、之、神、田、免、田、等、寄、附、在、之、
 知、行、子、今、無、相、違、之、處、也、。然、間、彼、孫、子、崇、敬、而、如、先、
 祖、。然、以、成、之、家、業、以、式、部、大、夫、範、綱、。取、智、令、讓、與、畢、。後、
 彼、範、綱、者、後、白、河、法、皇、為、御、氣、色、之、仁、。評、氏、追、討、之、事、
 許、申、之、由、。有、其、間、之、間、依、淨、戒、禪、門、之、。贊、播、磨、國、仁、被、
 配、流、。其、時、當、寺、住、侶、圓、妙、房、律、師、。時、彼、配、所、仁、令、下、
 向、相、訪、子、細、之、處、。範、綱、云、昔、間、以、成、坂、北、之、家、門、繼、業、
 偏、豐、原、寺、神、慮、也、。今、又、吾、二、度、坂、北、仁、令、歸、國、事、。可、以、依、豐、
 原、寺、之、神、德、。仍、種、々、認、願、書、與、彼、律、師、。納、神、殿、。可、以、令、祈、
 念、之、由、。依、被、感、申、押、丹、誠、。凝、懇、祈、之、處、仁、三、箇、年、之、內、
 如、祈、念、當、國、仁、令、歸、宅、。已、。彼、願、書、兩、條、之、旨、趣、載、之、。一、
 者、醫、王、白、山、深、蛇、之、御、前、仁、挑、常、燈、。長、日、藥、師、供、。十、
 一、面、供、。深、沙、王、供、并、御、奉、幣、等、可、奉、備、法、樂、云、々、。二、者、
 可、勵、當、寺、興、隆、之、志、云、々、。赦、免、之、後、速、如、願、書、當、寺、仁、投、
 珍、財、畢、。

『豊原寺 演仙寺 本専寺 興宗寺 坪川家 史全』：白山豊原寺の縁起には、藤原利仁の父親は越前押領使である秦豊国の娘と結婚し、領地を坂井北部、南部の秦豊国の領地を継承したと記載されている。

③近世

○戦国・安土桃山時代

室町幕府が衰退していき、各地で戦国大名が互いに勢力を争い、戦国時代が始まる。この時期、浄土真宗の本願寺門徒は一向一揆勢として加賀から越前に度々進攻した。坂井郡に勢力を張った堀江氏をはじめとした国人や国衆と呼ばれる中小領主も、一向一揆に抵抗している。

永正3年(1506)に加賀一向一揆が侵入して、戦国大名の朝倉氏と九頭竜川を挟んで、大規模な合戦が繰り広げられた。この合戦に敗れた本願寺門流の有力寺院は隣国の加賀へと亡命した。また、霊峰と呼ばれる白山ともゆかりがある豊原寺(丸岡町豊原)は、奈良時代に泰澄たいちようによって開創されたと伝わる寺院で、天正2年(1574)の越前一向一揆では一揆の拠点になった。豊原寺内には数多くの僧侶のほか、甲冑師かっちゆうし・鍛冶師かじしなどの職人が居住し、一大都市として繁栄し、後世には豊原・小野・吉谷を併せて絶大な勢力を誇った。天正元年(1573)、織田信長によって朝倉氏が滅ぼされると、翌年、越前では大規模な一向一揆が起き、その勢力は越前国一国を支配するまでに至った。しかし、天正3年(1575)には、再度侵攻してきた織田信長勢によって、一揆勢力は掃討され、豊原寺もことごとく焼き払われた。一向一揆を平定した織田信長は、柴田勝家に越前を支配させた。勝家の甥・勝豊は、豊原の地に居城を置いたが、その後、勝豊は豊原を離れ、西方の小丘に城を築いた。そして城を移すにあたり、勝豊は、豊原に居住していた職人や寺社を城下に移した。これが城下町丸岡の始まりとなる。

○江戸時代

徳川家康によって、江戸幕府が開かれ、約260年もの江戸時代が始まる。越前国全体は、結城秀康を初代藩主とする越前藩が統治していた。丸岡城は越前藩の有力家臣が居住する支城であった。寛永元年(1624)に福井藩から独立して丸岡藩が成立し、越前藩附家老であった本多成重ほんだなりしげが幕命により初代藩主となると、丸岡藩主の居城となった。丸岡藩は初め本多家が治めたが、その後は、日向国延岡(宮崎県延岡市)から越後国糸魚川いといがわ(新潟県糸魚川市)、さらに丸岡に入った有馬家が治めた。

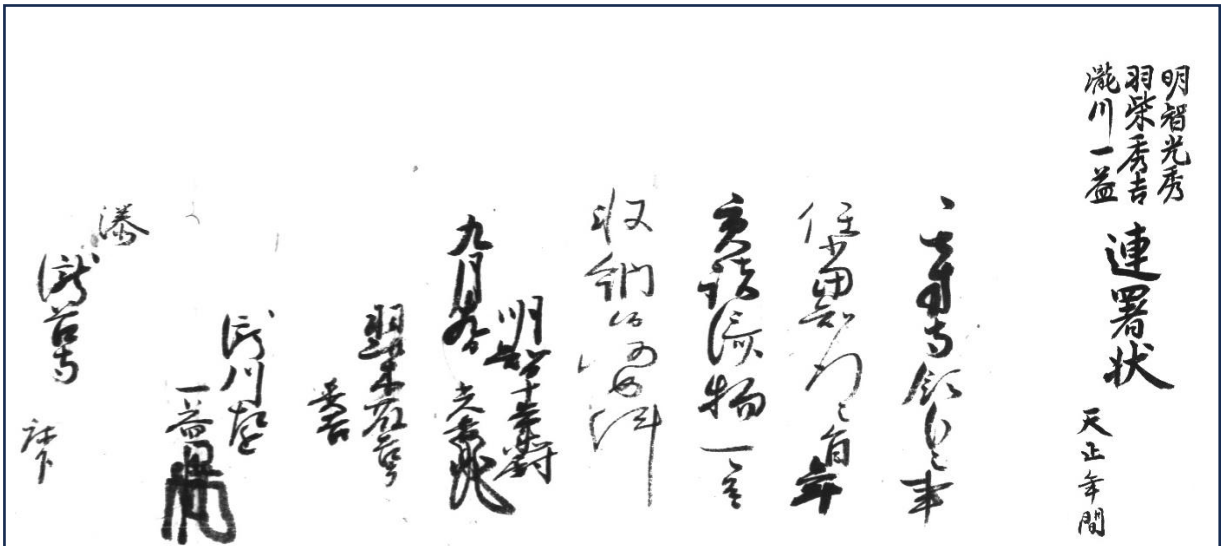
三国湊は重要な湊として、福井藩が治め、金津奉行が管轄した。河村瑞賢ずいけんにより、日本海沿岸から津軽海峡を通過して太平洋に出て江戸に入る東廻り航路や、日本海沿岸から関門海峡・瀬戸内海を通過して大坂に入る西廻り航路が開発されると、米や物資が集まる三国湊は、やがて北前船の寄港地として大いに発展した。

江戸時代の北陸道は、越前国の南から板取、今庄^{いまじょう}、湯尾^{ゆのお}、鯖波、脇本、今宿、府中、上鯖江、水落^{あそうず}、浅水、福井、舟橋、長崎・舟寄、金津、細呂木を経て、加賀へとつながっていた。坂井市域では、現在の春江町正蓮花^{しょうれんげ}、同寄安^{よりやす}、丸岡町南横地、同北横地、同長崎、同舟寄、坂井町若宮、同長畑、同下新庄、同五本、同上関、同下関を通り、このうち長崎と舟寄^{しゆくえき}に宿駅が設けられていた。

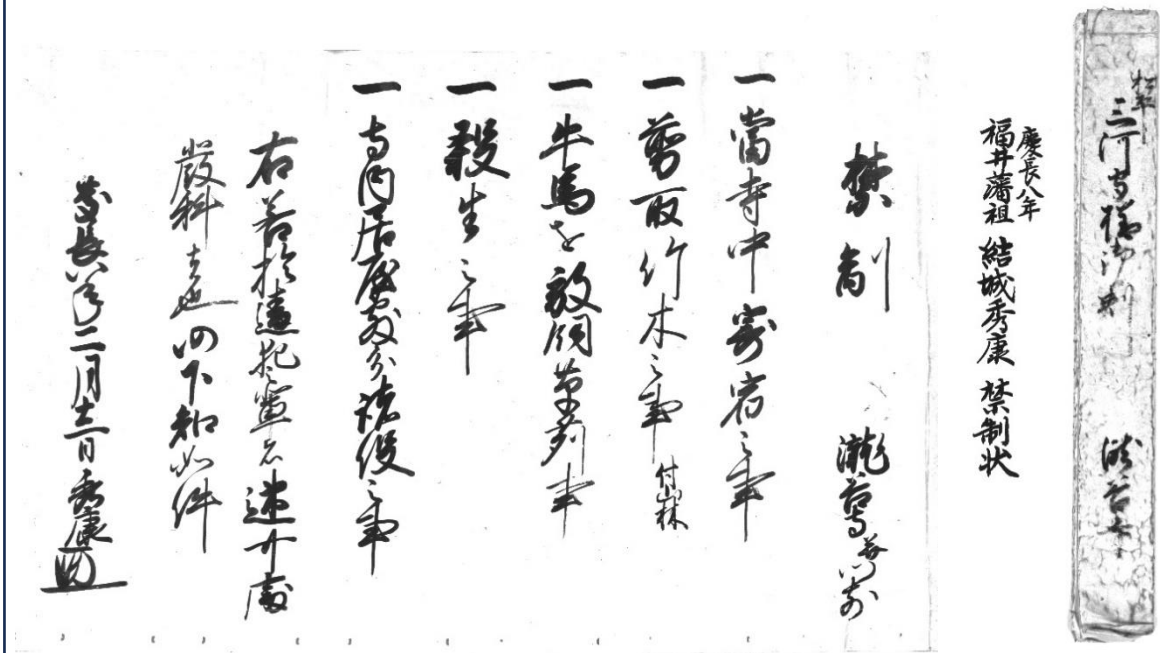
九頭竜川・竹田川・兵庫川・田島川など、河川が縦横に走る坂井平野では、川舟を用いた河川交通が発達していた。川舟は年貢米の輸送などに用いられた。川沿いの集落の河戸^{こうど}と言われる船着場から積み込まれた年貢米は、下流に位置する三国湊に集められ、海運で大坂まで運ばれていった。

江戸時代においても、村々の農地を灌漑する用水は、坂井平野の人々にとっての生命線であった。鳴鹿大堰でせき止められた九頭竜川の水は、取水口や水門で分水され、118か所の村を潤していた。用水があった「高棕郷」「磯部郷」「十郷」の村々では、鳴鹿大堰の築立や補修、取水口の江浚^{えざら}えや修理などを負担していた。一方、分水された各用水路の管理は、大連家や土肥家のような、「井奉行」（井守、井番とも言う）の家が務めた。また、新江用水をはじめ十郷用水の幹線から分流する新たな用水も開削された。このほか、江戸時代に発見された竹田鉱山は銀や銅が産出したと言われ、江戸時代終わりには丸岡藩によって大鉱脈が発見された。当時は争乱の時代であったことから、軍備拡充のために盛んに採掘された。

真宗門徒が多い本市では、集落単位での講も盛んに行われていた。江戸時代には、多くの真宗門徒にとって、最も身近な信仰の拠点は本尊を安置した道場であった。現在でも各地区の寺や区民館、道場、個人宅などで集落単位ごとに講や仏事が行われている。



瀧谷寺に対する明智光秀・羽柴秀吉・滝川一益連署安堵状



瀧谷寺に対する結城秀康禁制

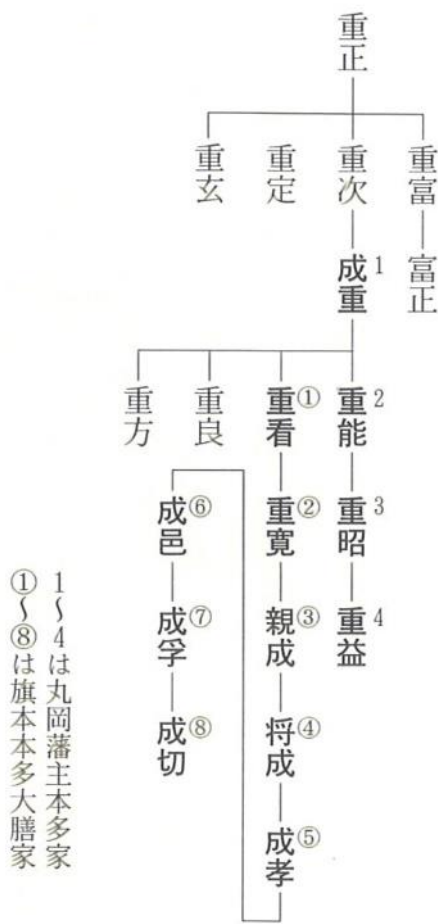
瀧谷寺は戦国時代、安土桃山時代、江戸時代でそれぞれの領主、大名から安堵状を受けている
(瀧谷寺所蔵資料)

越前藩（福井藩）と丸岡藩

慶長5年（1600）関ヶ原の戦いで勝利した徳川家康は、直ちに論功行賞を行い、下総城主の結城秀康に越前68万石を与えた。

結城秀康が越前に入り、越前藩（後の福井藩）が成立すると、家老今村盛次を丸岡に配置した。盛次はその領地滝谷をさらに九頭竜川岸まで拡張しようとした。

江戸前期には、九頭竜川へ入る船はすべて三国湊で取り調べを受けることとしたため、滝谷に入る船も三国までいかなければいけなくなり、港としての発展を封じられ、丸岡藩主本多成重は嚴重抗議した。



丸岡藩主本多氏・旗本本田大膳氏系図
（『新修 坂井町誌』）



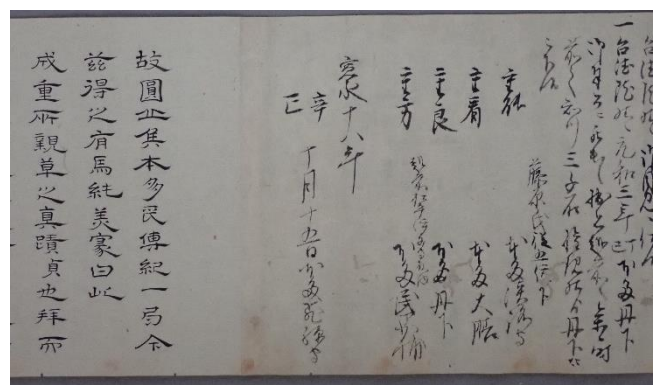
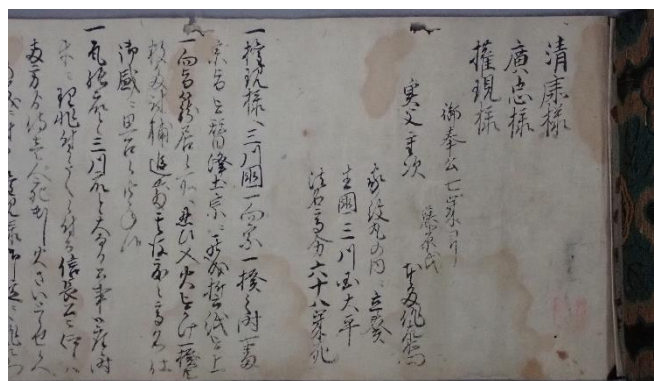
丸岡藩主有馬氏歴代系図
（『新修 坂井町誌』）



『広報さかい 平成25年11月号』より
旧藩主本多家の遺品が現存しており、平成25年に展示された



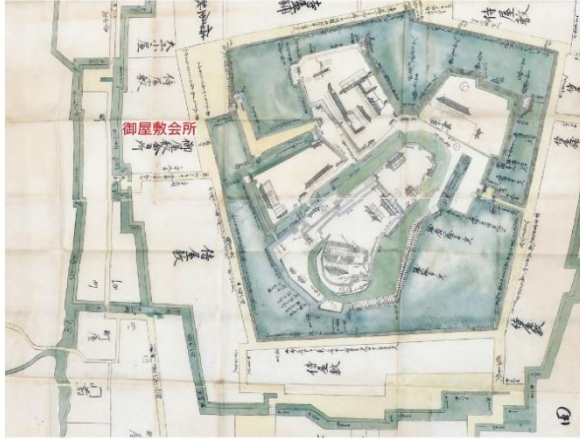
横矧二枚胴具足(本多家資料)
(国立歴史民俗博物館蔵)



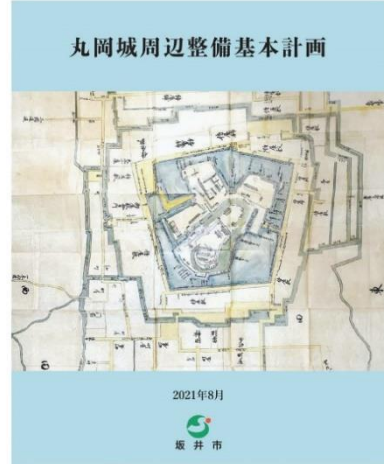
先祖由緒書(本多家資料)
(国立歴史民俗博物館蔵)



丸岡城の精緻な城下町絵図を新たに発見して



新発見の丸岡城下町絵図から本丸・大手門の付近御屋敷会所の存在は新発見で、米塩など重要物資納入、勘定方武士の仕事場と推測、藩の経済部門である(金沢城では御算用場と呼ぶ、映画「武士の家計簿」)。水路の細かい屈曲もわかる。



丸岡城周辺整備基本計画(2021年8月) 計画書は、全80頁。65～80頁は、越澤明氏編集執筆の城下町絵図集である。

江戸時代の城下町絵図は味わいがあり、人気もあり、現代の刊行物や歴史博物館の展示にも使用されることが多い。江戸の地図には御城(天守・二の丸・内堀)のみを描いた城絵図と城下町全体を描いた城下町絵図の二種類がある。

江戸時代の有力大名は兵学の城絵図を収集した。加賀藩、岡山藩、広島藩が収集した城絵図は現在、地元公共図書館で公開されている。

江戸幕府は正保元年(1644年)、全国の大名城下町図の作成と提出を命じた。この131城の正保城絵図は幕府の軍事機密資料であり、戊辰戦争で江戸城に入った官軍が接収して北越奥羽戦争で使用した。現存する63城は国立公文書館が公開しており、1986年に重要文化財に指定され、丸岡城も含まれる。

本年3月に坂井市教育委員会が古書籍商から購入した丸岡城下町絵図の発見者は私である。この地図

は正保図よりも精緻である。道幅、水路の幅と深さが記載され、侍屋敷と町屋の形も現代図にかなり近い。丸岡藩本多家が城下町全体の維持管理と防備(侍屋敷と町屋の管理、道路・水路の管理、城門の警備など)のために作成した地図である。

私は「丸岡城周辺整備基本計画」の委員長を務めたが、計画書の中に委員長の編集解説で城下町絵図集を掲載することになった。そのため全国の公共図書館と古書店を探索した。群馬県の収蔵家古書籍商の膨大な目録未掲載の所蔵品から、図名も志州鳥羽であったが、発見して撮影した。重要な地図であるため「丸岡城周辺整備基本計画」の表紙に使用し、計画書の中でも詳しく解説した。

一の新発見の丸岡城下町絵図は来年完成する丸岡城観光情報センターで複製が展示されて大評判になると予想する。また、小中学校で郷土史を学ぶときにも活用され、地元まちづくりに活動に役立つと期待する。



編集後記

▼人生初の音楽フェスに参加。カメラを向けると楽しい・大好きがあふれるキラキラの来場者たち。思わず笑みがこぼれる大満喫の一日でした。(恵)

▼Happy Birthday to you 生まれてきてくれてありがとう。あなたの夢が叶うことは私の幸せ。これからのあなたに私は何を残せるだろう。(春)

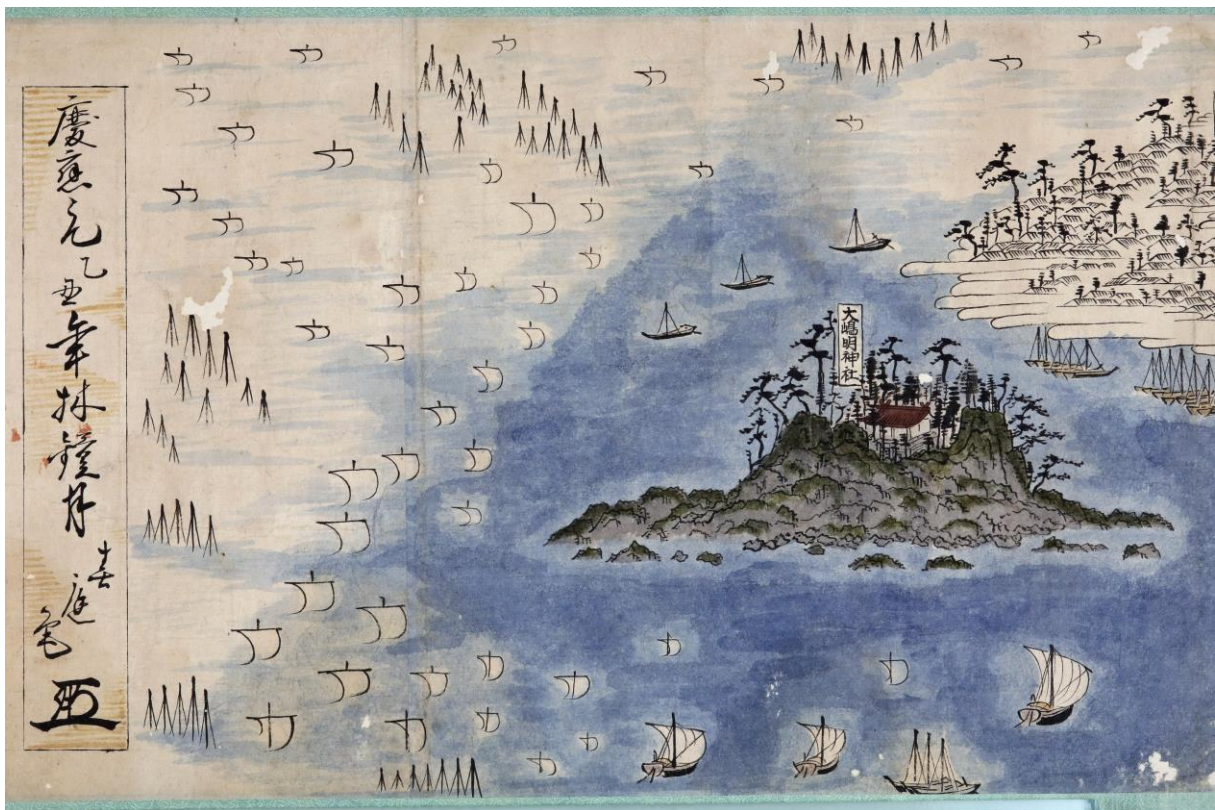
■今月の表紙
 坂井市アンテナショップのオープンを祝う高橋愛さんとスタッフ



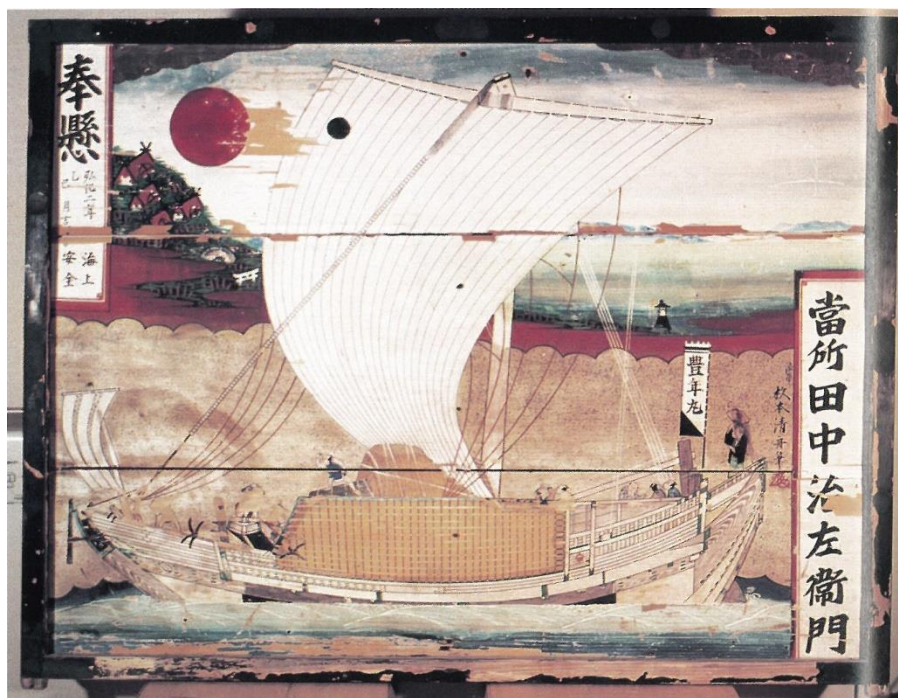
越澤 明(こしざわ あきら)
 北海道大学 名誉教授

丸岡城周辺整備基本計画策定委員長を務め、計画を策定。現在は、坂井市歴史まちづくり推進協議会長を務める。また、愛知県犬山市と岐阜県美濃市の歴史まちづくり協議会長も務めている。

寄稿者



越前三国湊風景之図（慶應元年（1865）、春庭作）（坂井市龍翔博物館収蔵）：
三国湊の繁栄した姿が描かれている。右端と左端のみを掲載



ベザイ船絵馬（弘化2年）（大湊神社所蔵）：弁才船（北前船）の様子が描かれている。